

## 蛇 遣 ひ 座 新 星 R S

本誌前號に報じた蛇遣ひ RS 星の増光は、八月十五日米國の Peltier 氏が発見しただけでなく、既に八月十一日にイタリヤの E. Loreta 氏が見たことが知れた。即ち I. A. U. Circulaire No. 448に據れば、

1933年八月十日	$7.5^m$ 以下	(Loreta)
11	5.8	(〃)
12	4.3	(〃)
13	5.1	(〃)
14	5.8	(〃)
15	6.2	(Loreta)
15	6.3	(Peltier)

このRS星は1905年に米國 Harvard 天文臺の Fleming 夫人が恒星スペクトルの検査中に発見したもので、位置は

赤經  $17^h 44^m 48^s$     赤緯  $-6^\circ 40'$     (1900.0)

光度は1898年頃に7.7となつたきり、漸次下降して、最後は11—12級あたりを不規則に昇降してゐたものである。スペクトルは Ocp 型である。

之れが俄然として増光し、八月十二日に4.3級となつたとは驚かざるを得ない。少しく星座に注意してゐれば、容易に発見し得ただらうと思ふ。今1933年度の大事件であるとしなければならない。

因みに、蛇遣ひ座には、今までに新星 (Nova) が5個知られてゐる。即ち、

番號	位置(1855.0)	發見年	出現年	最近光度	極大光度
	$h \quad m \quad s$				
1	$17 \ 21 \ 57 \ -21^\circ 21.2$	1604	1604	9.0	]1
2	$16 \ 51 \ 23 \ -12 \ 40.0$	1848	1848	12.8	5.5
3	$17 \ 42 \ 25 \ -6 \ 39.6$	1905	1898	11.8	(7.7(1898) (4.3(1933))
4	$18 \ 07 \ 21 \ +11 \ 34.5$		1919	[15.	7.5
5	$16 \ 46 \ 49 \ -29 \ 25.3$		1917	[15.	6.5

こんどの新星の電報は、Copenhagen から發せられた電文が頗るまづかつたため、吾人も始め少々まごついたが、近着の B. Z. d. A. N. Nr. 33 でも、面喰つたらしく、

“Nova Ophiuchi 3”といふ星は G. u. L. にも Prager 氏の Katalog にも載つてゐない。Handbuch d. Aph. Bd. 6 には Nova Oph. 3(1897)といふのが載つてゐるが、これは I. E. Woods が發見した Nova BB Oph. (1897)よりも15'だけ北である”などと書いてゐる、無理もない。Nova の順番などは決して一定してゐないものである。従つて今回の電文の如きは、發信者に大責任があるわけである。

山本一清博士が、大正9年の頃、「天文月報」に連載された新星總觀を見ると、下の如き記事がある。

**第十九 蛇遣座第三新星** 1898年六月30日のハアップ分光寫眞でフレミング夫人が「變だ」と氣が付いたので、同所のミス・カンノンが1888年以來の記録を調査して見て、一種の變光星だと知れ、中央委員は之れを蛇遣座RS星と命名した。光度曲線は如何といふに、1888年以來、1898年五月31日までは大體11等級ぐらゐであるが、中頃(1893年から1896年頃までは)半等級ばかり昇つた氣味がある。然るに、1898年六月30日には一躍して7.7となり。それから復衰へて、其の年の末には元の11等に歸つたが、それから後も少許の變動は絶えない。例へば、1900年四月には俄然9.3等となり、其の後衰へ、更に又1905年には9.8等となり、翌年には10等となつた。即ち、之れで見ると、二三年毎に多少の昇降をやつてゐるらしい。

スペクトルは、1898年七月中旬頃には、大體セツキ式第3型で、水素輝線が著しい。しかし $\lambda 4691$ 、 $\lambda 4656$ の二つの輝線は、アルゴ座 $\gamma$ 星を除いては、他の變光星には全く類の無いものである。しかるに、以前、1894年八月28日のハアップ分光寫眞はK型で、輝線が一つも見當らない。之れで見ると、此の星は新星の様でもあり、又、不規則變光星のやうでもあり、一寸之れだけでは斷定が困難である。光の消長が絶えないとなれば、今後も尙ほ實際家の注意を促すべき星である。

今回の事件と思ひ合はせて、甚だ暗示に富んだ文である。